

132 東京法学院討論会所感

〔法学新報〕第一二二一號 明治三十三年六月二十日

○討論会所感

人に尚ぶ所は天才に非ず寧ろ修練にあり修練の功は我東京法学院討論会に於てか之を見る今回の懸賞に与れる者の如き何処に行くも必らずや失敗を取ることなからん之を六ヶ月前の彼等に比す殆んど別人の如し彼等須らく討論会に深謝すべし

吾人は曩に山本氏を以て国見山に喩えたりき庸詎ぞ揣らん彼れの力は業已に梅の谷の上にあらんとは所謂後生可畏とは即ち是、

上内氏曰く積極論者の第一等賞は岩井君に落つ可く信じたりと此の日恰かも君の演壇に立ちて舌端風雲を成しつゝあるの際忽ち回向院の本場所荒岩か常陸山に泉川に撓められながら巧みに得意の蹴返しをやりて大喝采を博したるの注進に接す、岩井君、儻くは或は之れが匹儔たらん耶然りと雖も君の学の才は果して荒岩の力と術とに対して愧色なき耶敢て識者に質す

中野祐氏院内切つての功者なり大塚善太郎君は本会に付て一方ならぬ尽力を為されたる者なれば苟くも本会ある間は忘る可らざるの人なりと披露に及ぶ大塚君蓋し有難涙に咽ぶらん、呵々或は曰く懸賞討論は野鄙陋劣の譏を免れずと奚を以て爾か云ふや吾人をして忌憚なく言はしむれば彼の講談会の活気なく興味

なく而して学問勸奨の方法たるなきに勝れること万々なり知らず院の幹事たる人、之を以て彼に代ゆるの意あるやなきや

新進の弁護士野村安次郎氏、上内恒三郎氏が高く自ら持するなくして親しく討論の勞を執られたるは吾人の大に服する所、今後滋々此の例あらんことを望む花井氏の如き石山氏の如き卜部氏の如き未だ老朽と云ふ程にはあらねど公務私務に駆られて法理に疎なり寧ろ若かんや新進の士の熱心熱腸に、会の委員たる者毎回宜しく通知を發して其の出席を促かすべきなり

溝部信孝氏、山田辰之進氏、思想と弁舌と両つながら相敵す風を以てすれば溝部氏、山田氏に勝り愛嬌を以てすれば則ち山田氏、溝部氏の上に在り一二年後の三役は蓋し彼等の占むる所とならんか（不悉信書屋主人投）